



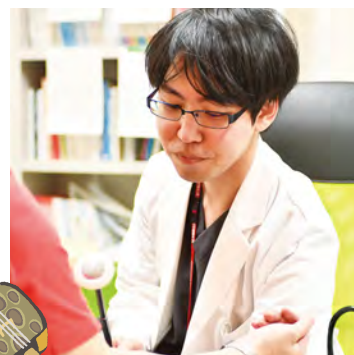
オール沖縄で医師のキャリアを考えるマガジン

Muru Uchina

ムルウチナー

2020

VOL.08





Muru Uchina

ムルウチナー

オール沖縄で 医師のキャリアを考えるマガジン

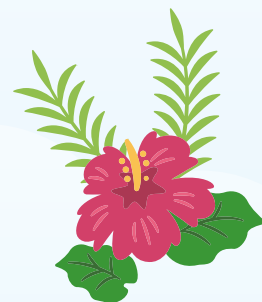
沖縄で活躍する医師たちを通して
沖縄の医療と臨床研修の魅力を紹介するマガジン『ムルウチナー』。

『ムル』は全部、『ウチナー』は沖縄を意味します。

島の人々の健康を守るためには
地域住民との“信頼関係”と地域医療機関との“連携”が必要不可欠です。

医療の本質と島の未来を見つめ続ける沖縄県の医師たちの

『ムルウチナー』を感じていただけたら幸いです。





2020 Winter Vol.08 INDEX



P.02
Top Interview

医師としての自信と誇りと幸せが生まれる場所。

琉球大学医学部附属病院 病院長
大屋 祐輔 先生



P.05
Hospital Review

公立久米島病院



P.06
Special Talk

特集：沖縄で外科医を目指すこと

#01

独立行政法人国立病院機構
沖縄病院 院長
川畑 勉 先生

#02

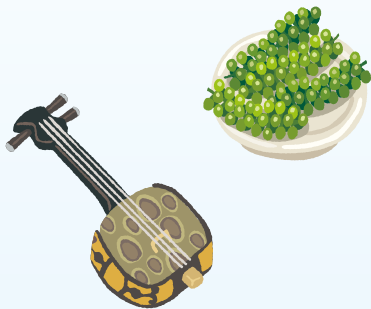
琉球大学医学部附属病院
第二外科 教授
國吉 幸男 先生

#03

琉球大学医学部附属病院
第一外科 教授
高槻 光寿 先生

P.09

Okinawa Crossword Puzzle
沖縄クロスワードパズル



P.10

OKINAWA DOCTORS SCENE
沖縄の離島で働く医師の話
～ 地域枠医師特集～



沖縄県立宮古病院

#01

内科（総合内科）
當銘 大吾郎 先生

#02

内科（総合診療）
湧川 朝雅 先生

#03

内科（総合診療）
與那覇 忠博 先生

P.13

まとめ 医局長の声

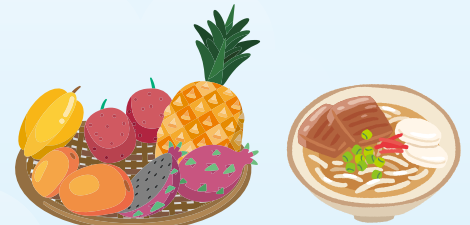
琉球大学医学部附属病院 第三内科 医局長
崎間 洋邦 先生



P.14

OKINAWA Residents Story

琉球大学医学部附属病院 第一内科 専攻医
上間 恵理子 先生



P.16

まとめ 医局長の声

琉球大学医学部附属病院 第一内科 医局長・特命講師（肝疾患診療相談室）
前城 達次 先生





医師としての 自信と誇りと幸せが 生まれる場所。

琉球大学医学部附属病院 第三内科（循環器・腎臓・神経内科学）の教授であり、
医局や大学病院に止まることなく、沖縄県全体の医師教育にも尽力してきた。

2019年4月1日、琉球大学医学部附属病院の病院長に就任。

大学病院という大きな船の舵取りを任された大屋祐輔病院長が語る、
沖縄県の医療と医師教育、そしてこの地でキャリアを築いていく魅力とは？

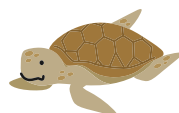
Top Interview

琉球大学医学部附属病院 病院長

大屋 祐輔 先生

Yusuke Ohya

福岡県出身。九州大学医学部卒業。米シンシナティ大学医学部生理学教室留学、九州大学医学部（第二内科）助手、講師を経て、2002年より琉球大学医学部附属病院第三内科助教授。2009年より琉球大学大学院医学研究科循環器・腎臓・神経内科学講座教授。2019年4月より琉球大学医学部附属病院の病院長に就任。琉球大学理事・副学長も兼任する。





九州大学から沖縄の地へ 沖縄全体の医師教育にも尽力

2019年4月1日、琉球大学医学部附属病院（以降、琉大）の病院長に第三内科の教授である大屋祐輔先生が就任した。

福岡県に生まれ育ち、九州大学医学部を卒業後、同大学の第二内科に入局し、2002年に琉大の第三内科に助教として着任。2009年には教授に就任した。大屋先生の専門は脳卒中、高血圧、心筋梗塞と幅広く、予防医学も含めた心血管疾患の臨床、研究に名を馳せる。

九州から沖縄の地へ来た理由を聞くと、「高校、大学時代の先輩が琉大の第三内科の教授になって、うちに来ないかと誘われたからなんです。断ることもできましたが、僕は打算や損得勘定ではなく、人情で動いてしまうんですよ」と、トレードマークの笑顔を輝かせる。全身は若さであふれ、その笑顔と相まって多くの人を惹

きつける明るい人柄も魅力だ。これまで大屋先生は、医局や大学病院に止まることなく沖縄県全体の医師教育や人材育成にも尽力してきた。

地域医療再生基金事業において、沖縄県全体の共同利用施設として医学・医療教育を行う、「おきなわクリニカルシミュレーションセンター」の設立を提案し、プロジェクトリーダーとして開設（2012年3月）にも携わった。このセンターはハワイ大学との提携により実現した欧米型の教育施設であり、沖縄県下全ての医療系学生や医療者を対象としたシミュレーション教育を提供している。

「沖縄県は日本一の臨床教育を行っており、医師たちのモチベーションも高く、新しいことにチャレンジできる風土がある。これらを活かすにはどうしたらいいのかを考え、シミュレーションセンターの開設を提案しました。このセンターの大きなポイントは、沖縄県の3つの研修群である【沖縄県立病院群】、

【群星沖縄研修群】、そして琉大の【RYUMIC群】が共同で行った最初の取り組みだということですよ」

この取り組みは、その後、設立母体の異なる3つの研修病院群が連携し、沖縄県があたかも一つの病院であるように研修医を育てる画期的な教育体制、「オール沖縄〜赤瓦プロジェクト」の実現につながる大きな一歩となった。

教育のエキスパートとなる 優れた医師を沖縄で育てる

さらに大屋先生は、「ハワイ沖縄医学教育フェローシッププログラム」を2012年に立ち上げる。沖縄の医学教育のリーダーとなる医師（指導医）の育成を目的とし、ハワイ大学医学部と共同で開発したプログラムを通して、医学教育に必要な知識・スキルを習得できるものだ。プログラムを修了した際には、医学教育のエキスパートの証としてピンバッジが贈られる。

「ハワイ沖縄医学教育フェローシッププログラム」には、3つの研修病院群から毎年7、8名の医師が参加。これまでに40名以上がプログラムを修了し、医学生や若手医師の教育、指導に携わっている。さらに、このプログラムは「沖縄県で学生教育や医師教育を継続に行うこと」を参加条件に

しており、県内に優秀な指導医を確保できるという効果もある。

「沖縄県全体として何かをやるうとしたとき、このプログラムを修了した医師たちが集まり手伝ってくれるんです。設立母体や病院の垣根を越えて共同で何かができるというのは、沖縄県ならではの思いです」





医師としての 自信と誇りと幸せが 生まれる場所。

こうしたプログラムやシミュレーションセンターの開設など、大屋先生の発案や取り組みが円滑に実現していったのは、沖縄県や医師会、3つの研修病院群、そしてハワイ大学などの協力があってこそだが、そこには多くの協力者を惹きつける大屋先生の人柄も大きく影響しているに違いない。

沖縄の医療の魅力は、 進化し続ける教育にある

大屋先生の座右の銘は、「財を遺すは下、事業を遺すは中、人を遺すは上なり。されど、財なくんば事業保ち難く、事業なくんば人育ち難し」。明治時代の医師・官僚・政治家である後藤新平の言葉だ。

「大学病院は人を育て、遺すことも大きな使命です。しかし、安定した病院経営と運営が根底になれば、人を育てることも新たなチャレンジもできません」



大屋先生は後藤新平の言葉を強く胸に刻みながら、琉大という大きな船の舵を取る。安心安全で、信頼される質の高い医療はもちろん、地域医療の向上、高度・先進医療の提供、地域やアジアに根ざした医学研究の推進、さらに2025年予定の西普天間地区への移転準備という重要な役割を果たすために力を注いでいく。

「目標達成にはスタッフが一体となつて取り組む体制が必要であり、そのために重要となるのがコミュニケーションです。部署間、職種間、患者と医療者など、さまざまな場面でコミュニケーションが取りやすい環境づくりを努め、同じ船に乗っている者同士の気持ちが一つになる、強固なチームワークづくりを推し進めていきたいです」

沖縄県の医療の特徴を聞くと、大屋先生は直ぐに「教育、だと答えた。沖縄は医師教育に非常に熱心であり、医師とし

ての高い基本能力を習得できる場所である。シミュレーションセンターの開設や医学教育のリーダーを育てるプログラムなど、大屋先生たちの新たな取り組みによって、沖縄の教育はさらなる進化を続けている。患者は優しく若手医師の研鑽に協力的であり、沖縄は医師人生をスタートする、これ以上ない最高の場所だと言っても過言ではない。そして、沖縄県の医療の最大の魅力は、大屋先生の次の言葉に集約されているように思う。

「医学生たちにはよくこう言っているんです。『沖縄は日本一の臨床教育を提供しており、医者として成長する最高の場所。みなさんはとても幸せなんです。沖縄で学んだ医師として自信と誇りをもって生きていきなさい』」

そう語った大屋先生の表情には、どこにも負けない沖縄の医療の自信と誇りが、大きな笑顔となって輝いていた。

Q. 大屋先生にとって沖縄とは？

A. 優れた臨床教育があり、
医師として成長する最高の場所。



公立久米島病院

Kumejima Hospital



Interview

病院長
會澤 佳昭 先生
Yoshiaki Aizawa

久米島は、那覇空港から飛行機で約30分、沖縄本島から南西に約100km離れた場所に位置する、「日本の渚百選」に選ばれたアイフビーチなどの豊かな自然に囲まれた美しい島です。

公立久米島病院は久米島の唯一の病院として、人口9千人弱の島民と観光客の健康を支えています。病棟は全科混合病棟であり外来は細分化されておらず、救急は一次から三次まで対応。当院で対応できない高度医療は本土の医療機関にコンサルトをして、ドクターヘリや自衛隊ヘリの移送手続きをしています。

疾患としては高齢者の肺炎、感染症、心不全、脳血管障害が多く、骨折後のリハビリテーション、がんの終末期医療や緩和医療、訪問診療や在宅での看取りまで行います。さらに、患者さんの家屋調査に向向き、退院後の必要なサービスを、ご家族や多職種と話し合い、自宅退院の流れをつくるなど、

当院での研修によって実に多彩な医療を経験することができ、また、高齢者は多数の疾患を併せ持った方が多く、病気に関してはもちろん、生活背景も理解する必要があります。「この患者さんにとって最適な医療とは何か？」を常に考えながらの研修は、将来、家庭医や総合診療医を目指す医師にとって最適です。臓器別専門医を目指す方にとっても大きな力となるでしょう。

仕事環境も抜群に良く、島民は病院スタッフの知り合いも多いため、患者さんと近い距離で接することができ、研修医に対して非常に協力的であることも魅力です。

生活環境も申し分なく、豊かな自然や美しい海と空に囲まれ、食事も美味しく、さらにコンビニやドラッグストアも揃っているため、何不自由なく穏やかに生活することができるといえます。

都会の大病院では経験できないような多彩で幅広い疾患に対して、患者さんにより近い目線で接しながら、高い初期対応能力を習得できる。久米島病院での経験は医師人生において間違いなく貴重なものとなるはずです。

【理念・基本方針】

- 患者様が安心できる医療を進めるとともに、病気や健康管理に気軽に相談できる久米島住民の主治病院をめざします。
- 久米島の住民と職員が、安心と信頼で結ばれ、心のかような病院をめざします。
- 患者様が満足し、職員が笑顔と優しさで生き生きと働ける病院をめざします。



公益社団法人地域医療振興協会

公立久米島病院

〒901-3121
沖縄県島尻郡久米島町字嘉手苺 572-3
TEL : 098-985-5555 (代表)

<https://kumejima.jadecom.or.jp/>

医師会長 會澤 佳昭 設立年月日 2012年

診療科目 標榜診療科：内科、外科、小児科、整形外科、眼科、泌尿器科、皮膚科、耳鼻咽喉科、産婦人科、精神科
特設外来：循環器内科、糖尿病内科、腎臓内科

病床数 一般病床：40床（個室8部屋/4人部屋8部屋）
人工透析：10床

久米島

那覇

沖縄で外科医を目指すこと。

それは若い医師たちにとって

大きなチャンスである。

Interview

独立行政法人国立病院機構
沖縄病院 院長

川畑 勉 先生

Tsutomu Kawabata

出身地：沖縄県那覇市

出身大学：名古屋大学医学部（1984年卒）

専門分野は呼吸器外科（肺がん）。1984年、名古屋大学医学部卒業後、琉球大学医学部附属病院第二外科（心臓血管外科、消化器外科、呼吸器外科）研修医。沖縄赤十字病院、琉球大学医学部附属病院などを経て、1994年、国立療養所沖縄病院に入職。2012年、独立行政法人国立病院機構沖縄病院副院長、2014年から同病院院長。沖縄県外科学会の会長も務める。

独立行政法人 国立病院機構

沖縄病院

〒901-2214

沖縄県宜野湾市我如古 3-20-14

TEL：098-898-2121

http://www.okinawa-hosp.jp/



沖縄でも外科医として十分な
キャリアを積むことが可能

独立行政法人国立病院機構
沖縄病院（以降、沖縄病院）は、「結核」「神経難病」「肺がん」「緩和医療」の四つを柱に掲げ、地域の医療ニーズに込んでいる。院長である川畑勉先生の専門は呼吸器外科であり、これまで沖縄の肺がん治療に大きく貢献してきた。さらに、沖縄県外科学会の会長として県内の外科医育成にも尽力している。

「外科医はいつの時代でも必要不可欠な医師。外科医を育てることは私の大きな役割であり使命です」

2019年、沖縄県外科学会は沖縄県、沖縄県医師会、琉球大学などと共同して、「沖縄県外科医不足対策委員会」を立ち上げた。若手外科医の意見も積極的に取り入れ、実効性のある外科医不足対策を検討している。

「初期研修後に県外へ流出してしまうことが課題です。外科の専門医取得に関しては基幹病院がしっかりあり、各外科分野に指導医も揃っているのが問題ありません。医学生や研修医のみならずが心配するようなことは全くないんです」と、川畑先生は声を大にして語った。

さらに、沖縄県外科学会では日本臨床外科学会と密に連携を取り、全国の施設で研修ができる国内外科研修制度や海外留学へのサポートなど、外科医として十分な研鑽ができる体制も構築している。

沖縄の外科医には
やりがいと面白さがある

川畑先生が病院長を務める沖縄病院は「呼吸器外科専門医修練基幹施設」であり、3名の呼吸器外科専門医と1名の認定登録医が在籍している。肺がんの5年生存率は全国のがん診療連携拠点病院の平均値を上回っており、県内では1番の成績を誇る。

「当院では臨床医として研鑽をしながら、琉球大学の社会人大学院生として学位を取得することもできます。外科医は経験を積み重ねていくと、研究による裏付けを求めなくなる時期が必ず来るんですよ」と、川畑先生は若手医師たちに学位取得を勧めている。外科医にとって重要なことは、「安全」な手術であり、そのためには患者の病態や解剖を正確に理解するためのアカデミックな知識も必要となる。

「人間の体の構造を知ることが外科医にとって重要です。血管

の走行異常が頭に入っていれば、そうした状況に遭遇しても冷静に対応することができる。『やっぱりそうだったか』という感覚がとても大事なんです」

そうした自分の診断や予測を手術によって実際に自らの目で確認できるのは外科医ならではの魅力であり、やりがいにもつながるだろう。もちろん、手術一つで患者が見違えるように元気になることは、何物にも代えがたい大きなやりがいであることに違いない。

「沖縄に外科医が少ないことは若手医師にとって大きなチャンス。なぜなら、多くの症例を手厚い指導の下で思う存分経験できるからです。私自身も同期がいなかったために、思う存分幅広い外科経験を積むことができ、呼吸器外科の面白さを知ることができた。外科医はやりがいの大きな仕事。若い医師のみならずと一緒に、沖縄の外科を盛り上げていけたら嬉しいですね」



情熱を注ぎ、チャレンジできる
やりがいのある分野

國吉幸男教授の専門は心臓血管外科。科長を務める琉球大学医学部附属病院(以降、琉大)の第二外科では、心臓、血管、呼吸器の外科専門分野に関する研究、診療を行っている。高度先進医療を積極的に導入した外科治療を実施しており、指定難病である「バッド・キアリ症候群」に対する外科治療では全国から患者が訪れる。

「島しょ県である沖縄県は、離島のなかで全ての医療を完結させる必要があるため、どんな専門医療でもやらなければならない。そうした情熱をもっている外科医が沖縄には必要なんです。しかも沖縄では人口が増えているため、日本のどこよりも多くの外科医を育てる必要があると感じています」と、國吉先生は熱い思いを語る。



外科の魅力とは何だろうか。國吉先生は自身の専門である心臓血管外科を例にこう答えた。

「この分野はまだ未開発な部分があり、たとえば胸部大動脈瘤の手術死亡率は現在でも5%くらいある。手術を發展させる余地があり、まだまだチャレンジできる分野なんです。自らの手で患者さんを絶対に治すんだという強い情熱を注ぐことができる。それが大きな魅力ですね」

若き医師や女性医師が手術の第一線で活躍

全医師数に占める女性医師の割合は年々増加傾向にあり、琉大医学科への女子入学者が4割を超える。外科医を増やすには、女性の外科医をどう育てるのかも重要となってくる。

「外科は女性でも活躍できる分野。だからこそ、女性の幸せもしっかり確保する必要があります」

琉大の第二外科にはベッドやシャワー室、洗濯機などを完備した女性医師専用の部屋が設置されている。2017年には、九州全体で2〜3人目、沖縄県では初の女性心臓血管外科医が誕生した。現在、第二外科には女性医師が3名在籍し、第一線で活躍している。外科医は多忙で厳しく、

女性医師に向かないというイメージがあるかもしれないが、そのイメージを払拭するに十分な証である。

都市部の大きな病院には多くの外科医が在籍しているが、沖縄はまだまだ外科医が少ない。だからこそ大きなメリットがあると國吉先生は言う。

「沖縄の小さい病院で若くして責任をもち、多くの経験を積んだ環境がどれだけ良かったのかと20年後に必ず思うはず。大きな病院で医局員が多ければその也大勢の扱い。関連病院へ派遣で回り、大学に戻ることなく退職する医師もいる。そうした医師人生は寂しいですよ。外科医としての腕だけではなく、医師人生においても沖縄の地で外科医になることは大きな魅力だと思います」

第二外科のモットーは「専門領域の診療において沖縄から本土へ一人も患者を送らない」。全国的にも早期に、植込み型補助人工心臓治療、ステントグラフト治療、MICS(低侵襲心臓治療)、TAVI(経カテーテル大動脈弁留置術)など高度先進医療を積極的に導入し、若き医師たちや女性医師が手術現場の第一線で活躍している。その一員となり、外科医としてキャリアを歩んでいく魅力は、長い医師人生のなかで計り知れないほど大きいに違いない。



Interview

琉球大学大学院
胸部心臓血管外科 教授

國吉 幸男 先生

Yukio Kuniyoshi

出身地：沖縄県那覇市

出身大学：秋田大学医学部（1980年卒）

専門分野は心臓血管外科。1980年、秋田大学医学部卒業。琉球大学保健学部附属病院医員、沖縄赤十字病院外科、琉球大学医学部外科学第二講座助教授などを経て、2005年から琉球大学医学部附属病院第二外科(心臓血管外科、呼吸器外科)の教授。

琉球大学医学部附属病院
第二外科
(心臓血管外科・呼吸器外科)

〒903-0215

沖縄県中頭郡西原町字上原 207

TEL：098-895-3331

<http://www.hosp.u-ryukyu.ac.jp/srg2/>

沖縄で研鑽を積むことは、

外科医としての腕だけではなく、

充実した医師人生にもつながる。

△ルウチナー

02 Special Talk

特集：沖縄で外科医を目指すこと

目の前の患者だけではなく、 将来の患者の命を助けることも 外科医として大切な役割である。

Interview

琉球大学大学院
消化器・腫瘍外科 教授

高槻 光寿 先生

Mitsuhsa Takatsuki

出身地：大分県佐伯市

出身大学：長崎大学医学部（1994年卒）

専門分野は消化器外科（肝胆膵）、移植外科。1994年、長崎大学医学部卒業後、同大学の移植・消化器外科に入局。京都大学、台湾高雄長庚記念病院肝胆外科・肝移植外科で研鑽を積み、国内のみならず国外（カザフスタン）でも肝移植の普及に努める。2019年7月1日、琉球大学医学部附属病院第一外科の教授として着任。

琉球大学医学部附属病院

第一外科

（消化器外科・腫瘍外科、内臓外科、小児外科）

〒903-0215

沖縄県中頭郡西原町字上原 207

TEL：098-895-3331（病院代表）

<http://www.ryukyu-surg1.org/>



肝臓移植手術を 沖縄で実施するために

琉球大学医学部附属病院（以下、琉大第一外科）の教授として、2019年7月1日に着任した高槻光寿先生。大分で生まれ育ち、長崎大学を卒業後は同大学の移植・消化器外科に入局。京都大学や台湾への留学などで肝胆膵外科や移植外科を専門に研鑽を積み、後進の育成にも力を入れてきた。

「これまでの臨床、研究、教育の実績が認められ、縁あって琉大病院の第一外科に教授として着任しました。沖縄はゆかりのない場所ですが、外科医としての人生を沖縄に捧げるつもりです」と、高槻先生は力強い言葉で語った。

沖縄県には投薬治療に限界のある重症度の高い肝硬変患者が相当数いる。しかし、これまで沖縄県では肝臓移植の普及が遅れていたため、多くの患者が県外に出て移植手術を受けてきた。現在まで県外で肝臓移植手術をした沖縄県の患者は70名以上にのぼる。高槻先生が第一外科の教授に着任したことで、琉大でも肝臓移植手術が実施可能となり、沖縄の外科治療が大きく前進することになった。

大切なのは、患者第一と アカデミックマインド

高槻先生は琉大の第一外科のモットーを、患者第一とした。一見、当たり前の言葉かもしれないが、臨床、研究、教育という幅広い役割を高いレベルで求められる大学病院では、患者本位の医療を見失いがちになる。当たり前のことを当たり前に前に行けることが、実は一番難しいこともある。

「自分の医療は本当に患者さんのためになっているか、研究のための研究になっていないか。医師教育にしても、それが患者さんの利益につながるなければ意味がありません」

さらに高槻先生は、外科医こそアカデミックマインドを持つことが重要だと説く。

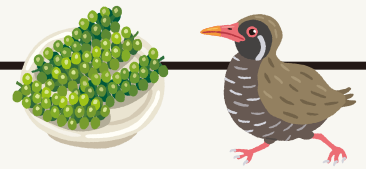
「外科医は目の前の患者さんだけではなく、将来の患者さんを助けることも大きな役割であり、そのためには研究などによるアカデミックマインドをもつことも重要。外科医は臓器を直接手で触れることができ、そのため課題がイメージしやすく、それらを分析して課題を解決し、将来の治療に繋げるアカデミックな視点は、とても重要なんです」

外科医は自らの手で患者を治す医師であり、高い倫理性とプロフェSSIONナリズムが求められる。高槻先生が専門とする移植外科は、ダイナミックな手術によりそのままで死亡は亡くなってしまう患者を、うまくいけば健康人レベルまで引き上げることができる。外科医は非常にやりがいがあり、さらに将来にわたって必要とされる医師だと高槻先生は言う。

「医療がどれだけ進歩しても、AIの時代になっても、外科医の需要はなくなりませんし、むしろ増していくでしょう。手術によって患者さんが治る喜びは何事にも変え難いものです。ぜひ多くの若いみなさんに沖縄の地で外科医を志してほしいですね」

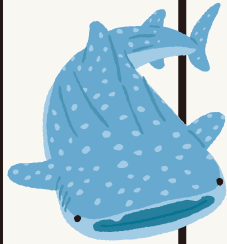
多くの人に必要とされ活躍できる、充実した外科医人生のスタート地点がここにある。





沖縄 クロスワードパズル

1	2			4	5
3					
			6 B		
7		E			
8		A			C
9			D		

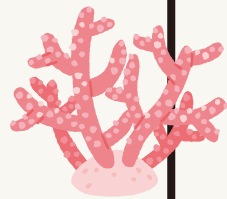


タテのカギ

- 1 沖縄の方言で「魚」は?
- 2 「どうも」、もしくは「こんにちは」、といった軽い挨拶代わりに使われる言葉は?
- 4 漁師などの海に関わる人は「うみんちゅ」、農業に関わる人は「○○○○」
- 5 カヤックに乗って探検ツアーが人気の「汽水域」に生える植物の森の名称は?
- 6 北谷町の「北谷」の読み方は?

ヨコのカギ

- 2 久米島の東にある「砂浜だけの島」の名称は?
- 3 沖縄のモノレールの愛称は?
- 7 沖縄本島北部に広がるやんばるエリアでバギーや巨大ガジュマルの探索で人気の「やんばる○○○○○○ツアー」
- 8 「でいごの花が咲き～」ではじまる THE BOOMの曲のタイトルは?
- 9 沖縄が全国トップの収穫量の野菜「冬瓜」の読み方は?



答え **これが解けたらあなたも**

A	B	な	C	D	E	ゆ
---	---	---	---	---	---	---

OKINAWA

DOCTORS SCENE #01

沖縄の離島で働く医師の話
～ 地域枠医師特集～



医師としての大きな土台を築く 地域枠の多彩で幅広い経験は 医師人生で大きなメリットとなる

沖縄県立宮古病院
内科（総合内科）

當銘 大吾郎

先生

Daigoro Toume

出身地：沖縄県那覇市

出身大学：琉球大学医学部地域枠1期生
(2015年卒)

琉球大学医学部に地域枠1期生として入学。卒業後は琉球大学医学部附属病院にて初期臨床研修。同大学の第三内科(循環器・腎臓・神経内科学)に入局し、地域枠の義務の一環として沖縄県立宮古病院へ。神経内科を専門に研鑽しながら、総合内科医として幅広い領域を診ている。

地域枠としての研鑽が 医師としてのベースアップに

當銘大吾郎先生は、琉球大学医学部に地域枠1期生として入学。地域枠は沖縄県より授業料・生活費が貸与され、卒業後、一定期間を県が指定する医療機関などに勤務すると返還が免除される制度だ。

「地域枠で入学したのは金銭面の援助が一番大きな理由ですが、生まれ育った沖縄が大好きなので、医師になっても県外に出ることは全く考えてなく、沖縄の地域医療に貢献できる制度だったことも大きな理由です」

大学卒業後、當銘先生は琉球大学医学部附属病院(以降、琉大)で初期臨床研修を行う。第三内科の神経内科を回った際、患者さんとしつくり話をしながら問診していく楽しさを経験し、研修修了後は神経内科医を目指すため、琉大の第三内科(循環器・腎臓・神経内科学)に入局した。現在は地域枠の義務により2年間の予定で県立宮古病院の内科に赴任し、神経内科はもちろん、総合内科のスタッフとして幅広い疾患を診ている。

「大学の医局から来ているということで神経内科の患者さんをたくさん紹介してもらっていますが、診断から検査、治療、その後の

フォローまで経験できるのは、ものすごく良いトレーニングになっています。それに加えて総合内科の医師として幅広い疾患も診る環境は、間違いなく医師としての大きなベースアップにつながっています」

どんな患者さんにも 利益をもたらす医師へ

県立宮古病院の患者は、神経内科としてはパーキンソン病などの神経変性疾患が多く、内科としては生活習慣病や脳血管疾患が多いという。當銘先生は医師になってまだ4年目。勉強中である神経内科を任せられることや、総合内科医として幅広い診療に携わることにも不安もあるだろう。

「わからないことがあれば調べればいいですし、電話で聞くこともできる。それと月に一回、専門医の先生が医局から応援医師として来られた際に相談できるので大丈夫です。確かに不安はありましたが、いろんな患者さんを診ることで医師として動じなくなりましたね」と、當銘先生は笑う。日々、成長を実感し、医師としての自信も少しずつ得ている証だ。

地域枠出身の医師は地域医

療に従事する義務があるため、専門医資格の取得は通常の医師より遅れることもある。當銘先生は神経内科の専門医資格は義務年限終了後に取得しようと考えており、資格取得が遅れることにデメリットは全く感じていないと言う。むしろ、医師として頑強な土台を築くことができる地域枠としての多彩で幅広い経験は、長い医師人生において大きなメリットだと感じている。

「一人でもやっていけるスキルを宮古病院で身につけたいです。医師は大きな責任を伴う仕事であり、たとえ専門外であっても僕が診たことで患者さんに不利益があつてはなりません。僕が診ることによってどんな患者さんにも大きな利益をもたらすような医師になりたいですね」と、當銘先生は充実した笑顔を見せた。



人そのものを診る医師に憧れ 家庭医の道に進む

石垣島に住んでいた幼いころ、近所のオジイが義足で、その足を元通りに治したいと強く思ったことで医師を目指した湧川朝雅先生。琉球大学医学部に進学し、1年生の夏に「沖縄県医師修学資金」があることを先輩から聞いた。この修学資金は、医師不足にある離島や北部地域などでの勤務を希望する医学部生の奨学金であり、指定医療機関で一定期間勤務した場合は償還が免除されるものだ。

「石垣島に住んでいたこともあって離島医療にもすごく興味がありましたし、親の手助けにもなるので利用することにしました。離島で働きたい医師にとって嬉しい制度ですよね」

1年生の7月から奨学金を利用した湧川先生の場合、卒業



5〜10年目の間に、指定医療機関に3年間勤務することで貸付金の償還が免除される。

湧川先生は大学を卒業後、那覇市立病院にて初期臨床研修を行い、後期研修では内科を選択し家庭医を目指した。

「家庭医は病気だけではなく、心理面や社会面からも患者さんに介入し、人そのものを診ます。それができる医師に憧れ、家庭医の道に進むことにしました」

幅広い実力を習得しながら 美しい島で暮らすという贅沢

県立宮古病院へは医師5年目で赴任した。多彩な疾患に加え、重症度や緊急性の高さ、さらに多くの社会的問題を背景に抱えているなど、訪れる患者層と症例はとにかく幅広い。結核や100万人に一人しか発症しないクロイツフェルト・ヤコブ病、ときに今まで聞いたことのない病気に遭遇することもあった。加えて、外国からのクルーズ船が年間300隻以上寄港するため国際診療も実施している。

「宮古病院は日本で一番幅広く多彩な診療をしていると思いますし、診断から治療、入院、そして訪問診療をして看取るという一連の流れを一貫して経験できる環境は、日本全国でもあま

りないと思います」

こうした環境での経験は医師としての自信も獲得することができ、その自信は冷静な判断力や対応力にもつながっていく。

「いろんな患者さんを診るので結構タフになるんですよ」と、湧川先生は笑顔を見せる。

2019年に総合内科専門医を取得し、2020年には家庭医療専門医試験を受ける予定だ。湧川先生は家庭医になるという目標に向けて着実に歩を進めている。

座右の銘は、負けじ魂。命を扱う医師という仕事は体力的にも精神的にも過酷な場面にも必ず遭遇する。自分自身に負けてしまえば、患者を救うことはできない。湧川先生は、負けじ魂を胸に、どんな病気やどんな状況にあっても、患者を救うためにひるむことなくチャレンジしていく。

「ずっと病院にいと忘れてしまいがちですが、一歩外に出ると宮古島がどれほど美しく素晴らしい場所なのかということがものすごくわかって、感動するんですよ」と、湧川先生は微笑む。

医師として着実に成長しながら、南国の美しい島で暮らす。そんな贅沢な医師生活も、なかなか経験することはできない沖縄の医療ならではの。

Tomomasa Wakugawa

出身地：沖縄県那覇市
出身大学：琉球大学医学部
(2013年卒)

琉球大学医学部卒業後、那覇市立病院にて初期臨床研修、後期研修(内科)。内科認定医を取得後、医師5年目で沖縄県立宮古病院に赴任。2019年に総合内科専門医を取得。現在、家庭医療専門医の取得に向けて研鑽中。

日本一ともいえる多彩な疾患と

医療の一連の流れを経験

幅広い実力と自信を獲得できる離島医療

沖縄県立宮古病院
内科(総合診療)

湧川 朝雅 先生

OKINAWA
DOCTORS
SCENE #02

沖縄の離島で働く医師の話
～地域枠医師特集～

OKINAWA DOCTORS SCENE #03

沖縄の離島で働く医師の話
～ 地域 梓 医師 特集 ～



離島医療で研鑽を積むことで どの病院でも活躍できる 幅広い実力を獲得する

沖縄県立宮古病院
内科（総合診療）

與那覇 忠博 先生

Tadahiro Yonaha

出身地：沖縄県那覇市

出身大学：自治医科大学（2010年卒）

自治医科大学を卒業後、沖縄県立中部病院にて初期臨床研修医、後期研修（内科）。2012年より沖縄県立南部医療センター・こども医療センターに赴任し、附属の久高診療所や薬国診療所などへ“島医者”として従事。2018年、沖縄県立宮古病院に赴任。家庭医療専門医であり、指導医として後進の育成にも努める。

臨床スキルだけではなく
ノンテクニカルスキルも習得

與那覇忠博先生は、県立宮古病院の内科（総合診療医）や外国人診療の支援を行う国際診療室を兼務し、さらに指導医として総合診療の専攻医（後期研修医）教育にも携わっている。

「医師を目指したのは、心臓病を抱えた弟が専門治療を受けるために、福岡県まで通っていたのをなんとかしたいと思ったことがきっかけです。沖縄の医師になっ

て弟を助けた。小学生の頃からそんな強い思いをずっと持ち続け、沖縄の医療に貢献できる自治医科大学に進みました」
卒業後は県立中部病院で研鑽を積み、家庭医の道に進む。2012年より勤務した県立南部医療センター・こども医療センターでは5年間在籍したうちの4年間を附属の離島診療所に勤務。医師4年目で、島医者となり、一人医師で島民の命を守るという重責を担ってきた。自治医大出身者は地域医療に従事する義務がある。沖縄の地域医療の特徴は離島医療であり、小さな島の診療所となれば一人医師体制であることも多い。
「医師一人となれば、全ての疾患を自分だけで診る必要がありますし、患者さんの生活背景

や島の文化、土地環境を考慮した診療も重要になります。保健、福祉、介護など院外の多職種の方と関わる機会も多いため、臨床スキルだけではなく、ノンテクニカルスキル（コミュニケーションやリーダーシップなどの能力）の習得もできます。離島で研鑽することで、どの病院でも活躍できる医師としての幅広い実力を獲得できるはず」と、與那覇先生は自信のある声で断言する。

大いなる力には
大いなる責任が伴う

県立宮古病院は医師数が少ないため、指導医である與那覇先生も他の医師と同様に、外来、当直と診療の第一線で活躍しながら、同時に若手医師の教育、指導も行っている。

「指導で心掛けているのは、自分の背中をみせ、ロールモデルとなること。自分の言動や行動などの立ち居振る舞いは、いいことも悪いことも全て同僚や後輩に伝わってしまう。自分の行う診療が正しいのかどうか、医師として然るべき態度で臨んでいるか、そのことを常に考え自己研鑽に努めています」

與那覇先生の座右の銘は、映画「パイパーマン」のなかに出てき

た、大いなる力には大いなる責任が伴う、という言葉だ。医師には高い公益性と道徳性、そして専門性が求められる。與那覇先生は後輩たちに医師としてのプロフェッショナルリズムを背中で見せられるよう、指導医といえども常に臨床の第一線に身を置き、学び続けている。

「卒後20年目くらいまでは外来、入院、当直と、その全てに携わることができる医療環境に身を置き、今と同じように第一線で研鑽を積んでいきたいですね」

自治医科大学の義務年限を終了し、2020年からは別の病院への赴任を予定しているが、與那覇先生は「来年もいくらかの期間をもらって、宮古病院へ応援にきたいと思っています」と語る。その言葉を聞いて、與那覇先生の指導を受けてきた湧川朝雅先生が大きな笑顔を見せた。與那覇先生の背中には医師としての大きな安心と信頼が宿っている。



医師人生は長い。目指す道を早くに決める必要はなく

本当にやりたいことを見つけることが大事

琉球大学医学部附属病院 第三内科 医局長 崎間 洋邦 先生



Hirokuni Sakima

出身地:沖縄県那覇市 出身大学:琉球大学医学部(2003年卒)
 専門分野は神経内科、脳卒中。琉球大学医学部を卒業後、同大学の第三内科(循環器・腎臓・神経内科)に入局。入局一年後、国立病院機構九州医療センターに赴任し、神経内科、脳卒中心野を研鑽する。2007年より琉球大学医学部附属病院の第三内科。医局長として医局員の教育や指導、キャリア形成のサポートにも携わっている。

一冊のマンガがきっかけで進むべき道を見つける

崎間洋邦先生が琉球大学医学部附属病院(以降、琉大)の第三内科(循環器・腎臓・神経内科)に入局したのは、ポリクリで腎臓内科や透析に興味をもったことがきっかけだった。当時は医局ストレート時代。進路をじっくり考える時間はなかった。2年目に医局人事で九州医療センターへの赴任が決まり、部屋を探しに行った帰りに寄った書店で、たまたま九州医療センターの脳血管内科部長

である岡田靖先生が監修したマンガ『脳血管救命センター物語』を見つけ、購入した。それをきっかけに崎間先生の目指す医療が、腎臓内科から神経内科、脳卒中へと変わっていく。

「せっかく九州医療センターに行くんだから、マンガで読んだ岡田靖先生の脳血管・神経内科をローテーションしようと思いました。第一希望で回って、この領域だったら自分の力が発揮できるのではと感じました。当時、沖縄では神経内科、脳卒中心野は手薄であり、ここががんばっ

て研鑽をして沖縄に戻れば、私でも何らかの役に立てると思っただけです」

九州医療センターへの赴任は、当初、医局人事により1年間の予定だったが、2年間延長をした。崎間先生は医師5年目に再び琉大の第三内科に戻り、現在に至るまで沖縄の神経内科、脳卒中心野の底上げに大きく貢献してきた。

大きな土台を築き 専門医資格を取得する

崎間先生は医局長としてスタッフたちのキャリアサポートにも携わっている。第三内科はジェネラルな要素もあり地域医療に貢献する地域枠出身の入局者も多く、離島に一人医師として赴任しても困らないスキルを習得できるプログラムづくりに努めている。

専門医資格の取得は最短で5年。しかし、地域枠出身の医師などは地域医療などに従事する義務年限があるため、取得が遅れることもある。これについて崎間先生はこう語った。

「専門医資格の取得が遅れても、その分、幅広い知識や技術という医師としての大きな土台を築いた上で専門医資格を取

得できる。これは医師として大きなメリットだと思うんです。私は医師10年目で専門医を取得し

たのですが、それは早い方ではありません。しかし、そこからの医師人生はまだまだ長いので、その間に学位もったり、色々できたのはよかったと思っています。目指す道を早くに決める必要はなく、いろんな場所を回っていくなかで、本当にやりたいことを見つけることが大事だと思います」

これまで医学博士、脳卒中専門医・指導医、神経内科専門医・指導医、総合内科専門医と、必要な資格は取得してきたが、崎間先生にとってこれらの資格は長い医師人生の一部に過ぎない。

「次の目標としては、沖縄県は若中年の男性脳出血患者が多く、その原因は主に高血圧にあるため一次予防の啓発活動にも力を入れたいと思っています。それと、神経内科や脳卒中心野に進んだのは、そのとき自分ができるべきことだと思ったから。当初目指していた腎臓内科を諦めたわけではない、これから先、その道に進む可能性もあるかもしれない。まだまだ自分のピークは先にあると思っていますから」と、崎間先生は目を輝かせた。

Hospital Data



琉球大学医学部附属病院
 第三内科(循環器・腎臓・神経内科)
 〒903-0215
 沖縄県中頭郡西原町字上原207
 TEL:098-895-1150
<http://www.naika3.med.u-ryukyu.ac.jp/>



沖縄県立宮古病院
 〒906-8550
 沖縄県宮古島市平良字下里 427-1
 TEL:0980-72-3151(代表)
<http://www.hosp.pref.okinawa.jp/miyako/>

OKINAWA Residents Story

沖縄の研修医の話



琉球大学医学部附属病院
第一内科 専攻医

INTERVIEW

上岡 恵理子 先生

Eriko Uema

出身地：沖縄県石垣市
出身大学：琉球大学医学部地域枠2期生（2016年卒）
琉球大学医学部（地域枠2期生）を卒業後、社会医療法人かりゆし会ハートライフ病院にて初期臨床研修。研修修了後、琉球大学医学部附属病院の第一内科（感染症・呼吸器・消化器）に入局。現在、卒後4年目の専攻医。

教育熱心で指導体制も充実 女性医師も働きやすい環境

石垣島で育った上岡恵理子先生は、小学生のころ仲の良かった友達と足を骨折し、治療のために本島にしばらく行ってしまったことに寂しい思いをした。

「なぜ石垣島で治療ができないんだろうと、医療に地域格差があることを小さいながらに感じていたんです。それがきっかけで離島や地域に貢献できる医師を目指すようになりました」

上岡先生は琉球大学医学部の地域枠2期生として入学し、卒業後はハートライフ病院にて初期臨床研修を行った。研修修了後



どんな場所でも格差のない医療を どんな患者さんであっても 最適な医療を提供できる医師に

は琉球大学医学部附属病院（以降、琉大）の第一内科（感染症・呼吸器・消化器）に入局。現在は専攻医2年目となる。

「第一内科に入局したのは、初期研修で経験した内視鏡が楽しかったということもありますし、内視鏡ができればへき地医療の場はもちろん、将来、子育てをしながらでも沖縄の医療に貢献できると思ったからです」

沖縄県は屋根瓦方式による教育に熱心な地である。症例に触れる機会がたくさんあり、患者から多くのことを学べるのが沖縄の医療の魅力だ。なかでも琉大は専門医や指導医資格を持っている医師が多く、教育体制も整っているため、症例の一つひとつをじっくり学べるのが特徴である。また、現在の第一内科は妊娠・子育て中など女性医師の多様なニーズに合わせた働き方ができることも、大きな魅力ではないかと上間先生は語る。

「第一内科では実際に子育て中の複数名の女性医師が活躍されています。妊娠・子育て中の支援制度があっても使えない職場もあると聞きますが、第一内科ではありがたいことに男性医師の方々も協力的な雰囲気です」

沖縄だからこそ経験できる 貴重な医療がある

沖縄の医療の地域格差をなくしたいと、思っている先生。「専門性を高めるか、ジェネラリストになるか」の両極端ではなく、内科全般のジェネラルベースの上で、消化器内科としての専門性を有した医師を目指している。

「内科なのに消化器しか診れないというのはなく、琉大と地域の病院を行き来しながらジェネラルも専門性も高め、どんな場所であってもできる限り格差のない医療を、どんな患者さんであってもその方にとつての最適な医療を提供できる医師になりたいです」

沖縄のへき地や離島医療の現場では、自分一人でなんとかしないといけない場面も多くあるが、患者さんの生活背景までを考慮しながら、多彩な症例を豊富に経験し、幅広い実力を獲得できるのは、島しょ県という特殊な環境にある沖縄県ならではの魅力だ。

「例えばですが、沖縄では肝硬変の原因として飲酒や脂肪肝などの割合が他県と比べ高く、薬剤での治療がメインとなるウイルス性肝炎や、自己免疫疾患よりもさらに生活指導が重要と

なっています。そういった環境から、生活背景を考慮し患者さんと話をすることが、沖縄では特に大切だと思っています」

診療は、医師である自分と目の前にいる患者だけの世界ではなく、患者の向こうには家族がいて、周りには看護師をはじめとしたさまざまなスタッフがいます。一人ひとりの患者に最適な医療を提供するためには、関わる全ての人の協力が不可欠であることを、上間先生は医師になつて強く感じているという。

「患者さんに対して、また関わる病院スタッフの方々に對しても、誠意をもって対応することも心がけています。患者さんやスタッフに私達の考えている事が伝わるように、逆に患者さんやスタッフがどう考えているかが私達に伝わるように。そうすることで検査や治療など、種々の事がスムーズに進みます。誠心誠意の姿勢があつてこそ、一人ひとりに最適な医療が実現できると考えています」

沖縄の地で研鑽を積むことで、医師としての幅広い実力はもちろん、人間としても大きく成長することができる。上間先生の力強い言葉と、医師としての凛とした姿勢と優しい笑顔を見て、そう確信した。



生まれ育った故郷の石垣島



一所懸命に学び、進むべき道に悩みぬき 得意分野を見つけること

琉球大学医学部附属病院 第一内科 医局長・特命講師（肝疾患診療相談室）前城 達次 先生



Tatsuji Maeshiro 出身地:沖縄県那覇市 出身大学:琉球大学医学部(1996年卒)
専門分野は消化器内科・肝疾患。琉球大学医学部卒業後、琉球大学医学部附属病院第一内科(感染症・呼吸器・消化器)に入局。浦添総合病院、沖縄県立宮古病院、与那原中央病院などを経て、2005年から第一内科。2015年より第一内科の医局長。肝疾患診療相談室の特命講師としても活躍。

医療はまさしく 人間万事塞翁が馬

「私の好きな言葉に、人間万事塞翁が馬があります。世の中、何が起るかわからないですから、いざというときにしっかりと対応できるように準備しておく必要がある。医療の世界が正にそれで、患者さんに何が起っても対応できるように、医師は幅広いスキルと心の余裕をもっておくことが大事。」

若い先生たちには、先輩の成功談ではなく失敗談をぜひ聞いてほしいですね。その失敗にどのような対応をしたのが重要なんです。そうするのは、琉球大学医学部附属病院(以降、琉大)第一内科の医局長である前城達次先生だ。医療の現場では何が起るかわからないため、いざというときにも余裕をもって対処できる幅広いスキルを習得しておくことが、安全で信頼できる医療に繋がる。そんな

医師へと成長できる環境が第一内科にはあると前城先生は言う。第一内科には関連病院が多く、医師として大病院の高度な専門性だけに留まらず、関連病院に出てコモンディーズを経験することで幅広いスキルを習得することができる。「専門医取得はもちろんですが、高度先進医療やサブスペシャリティ領域もじっくり深く経験できる。さらに関連病院に出てコモンディーズや内視鏡などの経験を積むことで、医師としての幅がぐっと広がります」

真の学びを得られるのは 患者さんからである

琉大での研鑽はアカデミックマインドを習得できることも大きな魅力であり、それは長い医師人生にとって大切なことだと前城先生は言う。「何らかの自分の得意分野を見つけて研究をしてほしいですね。得意分野があることで長い医師人生において高いモチベーションを維持することができます」前城先生の得意分野は肝疾患であり、肝疾患診療連携拠点病院の責任者でもある。沖縄県は飲酒による肝疾患が非常に多く、それが原因で幼い子どもを残して亡くなる若い母親も多にいる。前城先生は「肝疾患診療相談室」の特命講師として、肝炎コーディネーターや多職種と共に、住民向けの講義や勉強会を実施するなど、沖縄の肝疾患診療の底上げにも努めている。

前城先生が医師になった当時は医局ストレート時代であり、進路に悩む時間はなかった。医師の教育環境は整備されておらず、「10頑張ったうち9は無駄だった」と昔を振り返って大きく笑う。しかし、現在では効率的な学びや最短で資格取得を目指すことが主流だ。講習会や勉強会も豊富にあり、より効果的な勉強ができるようになった。前城先生は若手医師たちにこうメッセージを送る。「そうした環境を無駄にしないよう一所懸命学んでほしいと同時に、医師として真の学びを得られるのは患者さんからだということに自覚をもち、患者さんの気持ちを大切に医療を実践してください。そして、今は初期研修という進路に悩むことができる2年間がある。だからこそ悩んで悩んで、しっかりと自分の責任をもって進むべき道を見つけてほしいですね」

Hospital Data

琉球大学医学部附属病院
第一内科(感染症・呼吸器・消化器)
〒903-0215
沖縄県中頭郡西原町字上原207
TEL:098-895-1144
<http://www.ryukyu-med1.com/index.jsp>





オール沖縄で 医師のキャリアを考えるマガジン



「Muru Uchina(ムルウチナー)」第8号をお届けしましたが、いかがでしたでしょうか。

沖縄県地域医療支援センターは医師の地域偏在解消を目的とする組織です。

この冊子で少しでも私たちの想いをお伝えすることができれば幸いです。

ご意見・ご感想などお待ちしております。

発行



沖縄県地域医療支援センター

Okinawa Community Medicine Support Center

〒903-0215

沖縄県中頭郡西原町字上原207番地

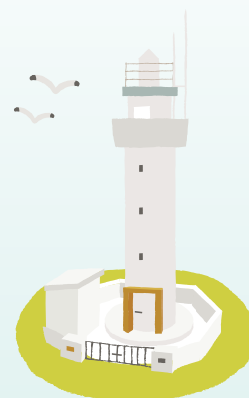
琉球大学医学部附属病院

おきなわクリニカルシミュレーションセンター内101

TEL : 098-895-1225

E-Mail : chi@w3.u-ryukyu.ac.jp

<http://www.chi.med.u-ryukyu.ac.jp>



ムルウチナー バックナンバー



vol.07



vol.06



vol.05



vol.04



vol.03



vol.02

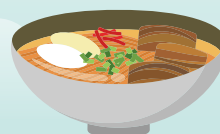


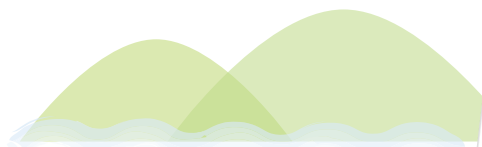
vol.01

編集制作

【民間医局】株式会社メディカル・プリンシプル社

ディレクター・デザイン：勝又シゲカズ 文：田口素行 撮影：小山英樹





Yonaguni
与那国島

Ishigaki
石垣島

Miyako
宮古島

Iriomote
西表島

Hateruma
波照間島



沖縄県地域医療支援センター

Okinawa Community Medicine Support Center

〒903-0215 沖縄県中頭郡西原町字上原207番地
琉球大学医学部附属病院 おきなわクリニカルシミュレーションセンター内101
TEL : 098-895-1225
E-Mail : chi@w3.u-ryukyu.ac.jp

<http://www.chi.med.u-ryukyu.ac.jp>

